

THREは84/88/91/92%と有意に低かった。一秒量でも、TTEで80/86/88/85%に対し、THREは95/96/98/93%と有意に低かった。血液ガス、六分間歩行試験では有意差を認めず、呼吸器QOLではTHREがTTEに比べて高い傾向にあった。

【考察】THREは呼吸機能の低下が小さく、回復も良好である。

## 26 胸部食道癌根治術後再発症例の臨床病理学的検討

中川 悟・藪崎 裕・梨本 篤  
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・瀧井 康公  
野村 達也・丸山 聡・神林智寿子  
金子 耕治・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】胸部食道癌根治術後の再発例を検討し、再発の特徴と危険因子について考察する。

【対象】2008年12月までに胸部食道癌にてR0手術が施行された134例を対象とした。

【結果】134例中55例(41%)に再発を認めた。非再発例と比較して再発例では有意に深達度は深く、リンパ節(LN)転移と静脈侵襲(v)の陽性例が多く、進行例が多かった。再発形式は、局所再発19例(郭清内LN15例、吻合部3例、縦隔再発1例)、遠隔再発36例(血行性16例、郭清外LN10例、血行性+郭清外LN2例、局所+遠隔同時再発7例)であった。遠隔再発例では局所再発例より有意にLN転移個数が5個以上の症例が多く、無病期間が短かった。

【結語】胸部食道癌における再発危険因子としては、深達度、LN転移、v陽性及び進行度が重要である。特にLN転移個数が5個以上の症例では早期に遠隔再発を来し易いため厳重な経過観察が必要である。

## 27 胸部下部食道・食道接合部癌に対する経裂孔的根治的食道切除術の治療成績

神田 達夫・鈴木 力\*・小杉 伸一  
西巻 正\*\*・矢島 和人・坂本 薫  
松本 淳・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野  
新潟大学医学部保健学科\*  
琉球大学医学部第一外科\*\*

【目的】教室では、頸部・上縦隔郭清を省略した経裂孔的アプローチによる根治的食道切除術を1994年より胸部下部食道癌に対して行ってきた。本術式の治療成績を報告する。

【患者】2006年12月までに本術式を行った胸部下部食道・食道胃接合部癌患者54名。

【選択基準】術前診断で腫瘍の局在が下部食道に限局し、臨床的に縦隔リンパ節転移陰性と診断された症例。平均年齢は65歳(35~83歳)。

【成績】53名において根治切除が行われた。手術時間と出血量の中央値は288分、508mlであった。24時間以上の呼吸器管理を要したものは4名(7%)のみであり、呼吸器合併症は5名(9%)と低率であった。在院死は認めていない。全54名の累積5年生存率は51%であり、開胸食道切除術と同等であった。

【結論】経裂孔的根治的食道切除術は、安全で周術期管理を容易にする。長期成績も開胸手術に劣らず、胸部下部食道癌手術の一選択肢になると思われる。

## II. 特別講演

### 食道癌診療のエビデンスとプラクティス

大阪大学大学院医学系研究科  
消化器外科学 教授

土岐 祐一郎